名人雑話

長門太夫のげんこつ

木谷蓬吟

「文樂」といふ名が始めてこの世に顏を出したは、恐らく今を距る百四五十年前の文化頃か、大阪千日前の東、高津橋の西に「文樂軒淨瑠璃稽古所」と書いた小さな看板からであると思ふ。素人淨瑠璃正木文樂軒の稽古所が追々に發展して「高津の文樂」と云はれ、大阪の中央に出て傑物第三世の文樂翁時代から「大阪の文樂」と伸し上げ、更に飛躍して「日本の文樂」と名を高め人形淨瑠璃の總代名詞として世界にも知られるようになつた。

文樂の名を、日本的に推し進めて行つた先達は、こゝに云ふ三代目竹本長門太夫であることは疑ひを容れないだらう。長門は寛政十二年に道頓堀宗右衞門町の更紗屋に生れ、後に天王寺河堀口料亭若松屋の父の家業を繼ぎ、元治元年六十五歳で亡くなつた。

長門はその非凡の藝能を、ひとり文樂の床に限つて發表し遂に床で倒れるまで、實に三十九年間を演續した。長門の至藝に引つけられた全國の善男善女は、文樂の長門と云はず「長門樣の文樂」と稱して信心渴仰した。その人たちが津々浦々へ歸つて行くと、モウ九段目のとなせや、すし屋の權太、御殿の政岡、逆櫓の松右衞門の噂が、電波のやうに擴まつて行つた。「長門樣の文樂」は長門歿後も「日本の文樂」として喧傳された。

私は曾て幾千の淨瑠璃人の中から、藝と人格を兼備した三人の藝聖を選拔した。義太夫節の始祖義太夫と第二世の政太夫と、そして我が長門太夫である。この三聖は藝も絕妙、人格も卓越、巨匠であると同時に巨人であり、藝術家として、また、人間としても完成された點に放て特に敬意を表するものである。

その藝格は、間口が廣く奧行も深くて底が知れない、大きく立派で情と艶に優れ、一貫して氣品の高いが特徵。忠臣藏茶屋場で云ふと、由良之助は無論本役、平右衞門もお手の物、九太夫も判内もハツキリと捌く上に、おかるの艶まで鮮やかに磨きをかける、四通八達の妙技に驚かされる。實曆以後沈淪の淨瑠璃を救ひ上げ、歸死回生の手術を加へて、天保安政の復活時代を築き上げた大恩人である。現代の文樂人よ、君たちの今日あるは、百年前のこの大きな柱石のおかげであることを忘れないようにして欲しい。

かうした巨匠だけに藝談苦心談も豐富にあるが今は觸れない。また人格者としての一面を素描した逸話も殊に夥多しい。例へば元祖義太夫に似て大の信教家であつたから、始終に仁とか愛とか云つた心持に引きつけられ、それが門弟とか新進とか、または世の難澁者への、同情となり慈愛となつて表はれた佳話だとか、社會の表面に出ないで、いつも椽の下の力持に滿足する陰德者の面目を發揮した美談が多い。そして他面には、藝道に對する良心の嚴

肅直實さは、まさに秋霜烈日の慨があつた。

もと、長門と私の家とは藝道の上に淺からぬ繋りを持つてゐるので、その逸話の如きも未だ活字化されないものが相當數ノートされてゐるが、それは別として、こゝに未聞の快心な寸話を副島八十六氏の著書に見つけたから拜借して紹介する。この一話は長門の人格的な立體像が巧みに彫り刻まれ、長門が創唱した所謂「文樂精神」なるものが窺知されるからである。

長崎の青木休七郎（大正三年、八十才）といふ人の實驗談によると、ある時、長門は伊勢の三井家から招かれて、三味線の二代目豐澤廣助と二三の太夫等と共に出向けた。廣助は當時三味線彈の頭目で、有數の名人と定評があつた。青木翁は若年から慰みに淨瑠璃の稽古を續けてゐる大の愛好家とて、この一座に加はつて露拂ひを勤めたが、なか〳〵の好評で更に懇望されて、今度は名人廣助の三味線で先代萩の御殿を語つた。これも調子よく順風に帆を上げて佳境に入つたところ、最後の政岡のクドキ、謂はゞ肝心の當て場になつて、どうしたひやうしか、急に三味線と外づれてきたから堪らぬ。聲はキイ〳〵、節はドタンバタン、嵐に狂ふ大浪小波の難破船、呼吸も絶え〳〵の醜態で、とにかく語り終つて汗だくだくで自分の宿へ引下つた。廣助も何氣なく高座から下りて樂屋へ來ると、待ち構えた長門は、いきなり拳を固めて廣助の横面を、眼玉も飛ぶほどなぐりつけた。

青木翁は宿へ歸ると、使ひが來て、廣助は長門から一座を放逐されて、ひとりで大阪へ歸るといふ。驚いた翁は早速現場へ駈けつけて見ると、長門は嚴めしい顏つきで膝もくづさず、廣助を睨みつけて、今、破門の宣告最中である。廣助はその前にしよんぼりと、兩手を疊について顏を得上げず謹聽してゐる。

長門の怒つたのは、廣助は玄人の頭目でありながら、慰みに語る素人に對して、玄人同樣の手を出すことは、己が分限を忘れたものだ、素玄の差別さへつかぬのは三味線彈としての資格がない、それに藝自慢の根性がチラチラ出るのは藝道の魔だ、今すぐ、文樂を廢めて素人に轉業せよ、と云ふのである。

青木翁の熱心な仲裁で解決したが、普通に云へば、ホンの一些事かも知れぬ、しかし、長門の「文樂精神」では藝の神聖を冒瀆する重大事件である。藝道から見ては、名人廣助といへども一歩も假藉せぬ峻烈長門、しかしそこには、平素の絶大な彼の威信が物を云ふことを見逃してはならぬ。そしてこの制裁を無抵抗に服從しようとする廣助の謙虛な態度と共に、眞に味のある美くしい光景ではないか。

そこに犯すべからざる「藝の威嚴」が躍如する

二人の藝術的良心の發露もうれしい

この噂が大阪に傳はつた時、全文樂人はギクリとした……廣助がなぐられたのでない、文樂がなぐられたからだ。

—長門の「文樂精神」は別に書く—